

筑波大学での一年間をふりかえって

郑 莹 媛

2012年は私にとって特別な一年だった。中国の天津市にある南開大学の大学院修士課程で日本教育史を勉強していた私は、交換留学生として筑波大学にやって来て、一年間の留学生生活を始めたからだ。

日本に来る前は、心の中に期待もあれば、不安な気持ちもあった。日本での生活に上手く慣れることができるか心配していたのである。こうした気持ちで、2012年4月2日、日本に到着した。

私を一の矢宿舎まで出迎えに来てくださったのは、宮玉婷先輩だった。同じ中国人だとは思わなかったので少し驚いたが、落ち着いた気分になった。その後、一年間お世話になる教育制度学研究室の先生方や先輩方にお会いして、皆さんの親切さや優しさが私の不安を解消してくれた。

日本での生活の基盤を整え、私は教育学の授業を受け始め、教育制度の研究会にも参加することとなった。最初は先生や先輩の話の内容を聞き取ることができず、イライラしてどうにもならなかったことを覚えている。しかし、集中して辞書を引きながら話を聞くと、少しずつわかるようになってきた。その時の嬉しさは、言葉では言い表せない。荒川麻里先生の授業では、学類生と共に、教育に関する様々な発表を聞き、話し合うことができ、本当に嬉しかった。教育制度研究会では、桑原敏明先生と荒川先生のご指導や先輩たちの考えを聞き、論文の書き方についても多くを勉強することができた。授業と研究会を通して、教育と教育学研究に関する幅広い知識を学ぶことができたのである。児童福祉やいじめ問題、教師、教員制度など分野も様々であった。そして日本だけではなく、アメリカ、オランダ、ロシアなど他の国々の教育制度も学ぶことができた。学ぶ中で、日本の授業の自由さ、面白さ、先生と学生たちの友人同士のような信頼関係、先生方の魅力、学生たちの活躍と真面目さ、発想の豊かさ、他人に対する思いやり、論文に対する真摯な態度などは特に印象に残り、多くの刺激を受けた。それだけでなく、清水一彦先生からはご著書『平成の大学改革を斬る』を、大谷奨先生からは報告書『進路指導と受験生心理』をいただき、またいつも私のことを気にかけてくださった。

教育制度の研究会の後には、食事会がある。そして、懇親会やそうめんパーティー、忘年会などもあった。こうした機会によって、研究や勉強に精一杯な研究室の皆さんは、普段の忙しさの中から一息いれてコミュニケーションを取り、美味しい料理を食べてリラックスできるのである。桑原先生が差し入れてくださったそうめん、荒川先生の手作りのケーキ、澤田裕之先輩のティラミスや星野真澄先輩の干し柿、トカチェンコ・スヴィトラナ先輩のサラダ、田邊良祐先輩のお鍋料理、黄海玉先輩、孫春蕾先輩たちの餃子など、いろいろな美味しい手作り料理をいただくことができて幸せだった。

食事会にとどまらず、時にはスポーツ活動も行われた。6月の上旬には、教育制度学研究室の先輩たちや学類生とともに「つくば国際ウォーキング大会」に参加した。私たちは「筑波山からつくばセンターまでの30キロコース」に挑戦した。最初は、最後まで歩く自信がなかった。しかし、歩いているうちに、みんなから勇気や自信をもらって、困難を乗り越え、終点まで一生懸命歩き抜くことが

できた。それは自分さえも考えられなかったことで、とても感動した。今思い出すと、あの時の根気や経験は一生の宝物になると思う。また、6月の下旬には、ソフトボール大会に参加した。下手だったが、はじめてバットを振ったときは本当に嬉しかった。ソフトボールというスポーツ、チームワークの重要性、みんなの笑顔も一生忘れられないものとなった。

同時に、私は留学センターでの日本語の授業も受けた。日本での生活に慣れるにつれ、授業はそれほど難しくはなくなった。日本に関する様々な知識を学び、また新しい友達もできて、一緒にインタビュー調査やセンターの活動に参加して、本当に良い経験になった。

日本に来て、初めてのアルバイトを始めたことも私にとって良い経験になった。それは2012年夏休みのことだ。友達二人と一緒につくばから遠い和歌山県の白浜に行って、美しい海辺のホテルで、2ヶ月間のアルバイト生活を送った。その間、働くことの楽しさと辛さも経験した。親切に仕事を教えてくださったアルバイト先のスタッフの皆さんに、心から感謝の気持ちを伝えたい。

留学期間は一年間なので、できるだけ多くのことを経験して、日本の美味しい食べ物を食べて、いろいろなところに旅行したいと思っていた。春には、お台場や東京タワーにも行った。夏には、鎌倉や横浜、秋には日光の紅葉を見に行き、そして、冬には沖縄にも行くことができた。機会があれば、もっと多くのところに行き、日本を旅してみたい。

中国に帰国後は、日本での留学経験を生かして日本の教育史を勉強し続け、将来、小学校の教師になることが私の夢である。

時間の経つのは早い。残り三ヶ月ほどである。さよならは本当に言いたくない。その代わりに、桑原敏明先生、清水一彦先生、荒川麻里先生、大谷奨先生をはじめ、筑波大学の先生方、研究室の院生、学類生の皆さんに深く感謝を申し上げたい。

この一年間、大変お世話になりました。日本に来て本当によかったです。皆さんにお会いすることができて本当に幸せでした。ありがとうございました。

郑 莹媛（筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻特別聴講生）